

## 『おもろさうし』にみる第一尚氏

島村 幸一<sup>1)</sup> 山本 正昭<sup>2)</sup>

The first Syou loyalfamily in “OMOROSAUSHI”

Koichi SHIMAMURA<sup>1)</sup> Masaaki YAMAMOTO<sup>2)</sup>

### I はじめに

『おもろさうし』全22巻に、第一尚氏（尚巴志王統）がどのように謡われているのか。興味深いテーマである（註1）。『おもろさうし』の編纂は、その扉書から第1が「嘉靖十年」（1531年）、第2が「万曆四十壹年」（1613年）、第3以下が「天啓三年」（1623年）の編纂とされている。ただし、第11、14、17、22の4巻には編纂年が記されていない。『おもろさうし』は、王権の中枢にかかわるオモロを謡った上巻（第1、第3～7）、種々のオモロを謡ったオモロを集めた中巻（第8～14）、「地方」を謡ったオモロを集めた下巻（第2と第15～21）と、その上中下巻を聖典とする附巻の第22よりなる琉球王府が編纂した宮廷歌謡集である。さらに、現在伝わる『おもろさうし』は1709年の首里グスクの焼失によって翌年の「康熙四十九年」（1710年）に「書きあらため」（再編纂）されたものである。この時、二本が作られ一本は首里グスクに格護された尚家本（御ぐすく本）、一本は王府儀礼の場で当時オモロを担っていたおもろ主取家（安仁屋家）に格護された安仁屋本である。尚家本には1553首のオモロが入り、沖縄戦で行方が不明になるが米国にあることが分かり、「ペリー来航百周年記念」の下に1953年に返還される（尚家から沖縄民政府立首里博物館に所蔵が移る）。安仁屋本も沖縄戦で行方が不明になり、現在も不明のままである。ただし、安仁屋本は明治以降、書写され仲吉本等に伝わる。これには1554首のオモロが入り、「書きあらため」の時に入った

語注を中心とする「言葉聞書」、句点等が付く。『おもろさうし』にみる第一尚氏」を考える場合、「言葉聞書」の記事は重要である（後述）。

『おもろさうし』第1-33～36までの連続する4首は、『中山世譜』（1701年）、『球陽』（1745年）等の正史に記される尚真王による「八重山征伐」（1500年）を謡っている。これは、第1の編纂年と符合する。また、第3-93・96・97等は、1609年の島津侵攻に琉球王府が抵抗することを謡うオモロである（註2）。これも第3の編纂年と見合う。あるいは、第12等を中心にして謡われる「君手擦りの百果報事」を謡うオモロの詞書きに記される年紀は、「嘉靖廿四年」（1545年。694・695）、「嘉靖廿八年」（1549年。731・733）、「万曆六年」（1578年。735・737）、「万曆十五年」（1587年。739）、「万曆三十五年」（1607年。740・743）である。これも、第12の編纂年「天啓三年」（1623年）と矛盾しない。『おもろさうし』の実質的な編纂年は、第3回目の「天啓三年」であったと思われる。すなわち、『おもろさうし』の編纂は第1を除いて、島津侵攻（1609年）以降の時期に行われている。

しかしそうはいつでも、『おもろさうし』は「おぎやか思い」（尚真王）を多く謡っている。オモロが具体的に謡う王は、ほとんど尚真王だけといってもよい。このことは、オモロの成立は尚真王時代（1477～1526年）がひとつの中心になっていると理解される。『おもろさうし』の編纂の実質が島津侵攻以降の時期であるとはいえ、編纂された『お

<sup>1)</sup> 立正大学名誉教授 〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16  
Professor Emeritus of Rissho University, 4-2-16, Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-8602, Japan

<sup>2)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1  
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

『おもしろさうし』の資料は、尚真王時代に謡われたオモロがひとつの中心であり、下限は島津侵攻期までであると考えられる。このことは、『おもしろさうし』の書体からもいえる。『おもしろさうし』の書体は平仮名を基調とする正書法で記されており、全22巻の表記は全巻にわたり基本的にぶれることがない。この正書法は古琉球期に王府が建てた仮名書き碑文（国王頌徳碑〈かたのはなの碑〉1543年、添継御門の南のひのもん1546年等）や王府が発給した古琉球期の辞令書の書体と同一である。これは、『おもしろさうし』が古琉球期に謡われたウタをその時代に文字化した歌謡集であることを物語る。この平仮名を基調とする正書法は、近世琉球期に作られた「ようとのひもん」（極楽山碑文）1620年や「本覚山碑文」1624年を最後に姿を消す（註3）。また、辞令書についても「嘉靖・隆慶・万暦年間が仮名文体、天啓・崇禎・順治年間が仮名交じりの文体、康熙年間から同治年間に至るまでは漢文体という三度の変遷」をたどり（註4）、島津侵攻以降の天啓年間（1621～1627年）以降、仮名を主体とする表記に漢字が大きく混じる表記に変わっていく。辞令書の書体の変遷は、仮名書き碑文が姿を消した時期と一致する。古琉球期にあった正書法は、近世琉球期に入ると衰微し消滅してしまう。オモロが仮名でしか表記できない歌謡であるとはいえ、第3回目の『おもしろさうし』の編纂年である「天啓三年」は、仮名書きの正書法を残すことができたギリギリの時期であったともいえる。そのようなことも含めて、『おもしろさうし』は古琉球期の産物であるといってもよい。ただし、『おもしろさうし』が古琉球期の産物であるといっても、オモロは尚真王以前を謡っているのかという問題がある。この点を明らかにすることが、本論を論ずる上で大きなポイントになる。

オモロが謡う男性的な人物は、てだ、てだ子、世の主、ちやら、按司、按司襲い等という一般名詞で謡われることがほとんどである。これは、比較的固有名詞で謡われる神女とは対照的である。しかし、その中であって例外が「おぎやか思い」（尚真王）であるが、もう一人、歴史的な人物として謡われるのが勝連の阿摩和利である。一般に知られている阿摩和利は、中城グスクの「忠臣」護佐丸を討ち、首里グスクの尚泰久王に迫ろうとした「逆臣」である

とされる。しかし、『おもしろさうし』には阿摩和利は勝連グスクの英雄として謡われ、護佐丸は登場することはない（註5）。阿摩和利が、第16「勝連具志川おもしろの御双紙」の1129・1134・1141に謡われている。その一首、1134は次のオモロである。

あおりやへがふし

一勝連の阿摩和利 玉みしやく 有り居な  
（勝連グスクの阿摩和利は玉みしやくがあるのか）

京 鎌倉 此れど 言ちへ 鳴響ま  
〔京都や鎌倉にこれを言って轟こう〕

又肝高の阿摩和利

（又肝高の阿摩和利は）

又島治りの御袖の按司

（又島治りの御袖の按司）

又国治りの御袖の按司

（又国治りの御袖の按司）

又首里 おわる てだ子す  
玉みしやく 有りよわれ

（首里グスクにおられるてだ子（国王）こそ  
玉のみしやくがお有りになるのだ）

「玉みしやく」はすばらしい柄杓、あるいはすばらしい酒をいう語である。第一・二節で勝連グスクの阿摩和利がそれを持っているのかと謡うが、最終節で「玉みしやく」を持っている者こそが、首里グスクにおられるてだ子であると謡っている。最終節に謡われるてだ子には、阿摩和利には使われていない「おわる」、「有りよわれ」という敬語が使われている。オモロ全体のテーマを凝縮して謡うことが多い反復部「京 鎌倉 此れど 言ちへ 鳴響ま」の「此れ」は、首里グスクにいるてだ子こそが「玉みしやく」を持っていることをいっていると理解される。第三・四節の「島治りの御袖の按司／国治りの御袖の按司」はてだ子をいっているか。第16-1134は、阿摩和利を通して謡うてだ子讃美のオモロであるといえる。第16等の地方オモロは間切を単位として編纂されており、その間切ごとに完結していることがほとんどである。したがって、他の間切を謡うことも他の間切から謡われることも少ない。その中であって、第16の後半に謡われる具志川間切のオモロには、1163「一江洲のたう島 江

洲の親国 肝高杜 弟 見ちやる 又此れる勝連  
又此れる肝高」(一江洲グスクの平らなシマは 江  
洲グスクの親国は 肝高杜が弟と見ている 又これ  
こそ勝連グスク 又これこそ肝高グスク)と謡って  
いる。江洲グスクは「たう島」であるのに対して、  
高く聳える勝連グスクが江洲グスクを「弟 見ちや  
る」と謡っている。これはグスクが立つ立地の高低  
や規模に重ねて、勝連グスクと江洲グスクの勢力関  
係を兄と弟になぞらえて謡っているオモロである。  
また、1163に連続する1164は「一天願のろの 国  
手持ちみ内に 勝連す 国手持ちぐすく 又笑い子  
のろの 又按司襲いぎや おより 勝連に 降れて」  
(一天願ノロが国手持ちみ内に 勝連グスクこそ国  
手持ち(曲玉)があるグスクだ 又按司襲いのため  
に 勝連グスクに降臨して)と謡っている。「国手  
持ちみ内」は勝連グスク城内にある御嶽「城内玉ノ  
ミウヂ嶽」(『琉球国由来記』巻14)のことである。  
そこに具志川間切のノロの「天願のろ」が勝連グス  
クの城主と思われる「按司襲い」のために降臨す  
ると謡っている。地方オモロにあっては、このよう  
なオモロは例外である。勝連間切に隣接する具志川  
間切の天願ノロが、勝連グスクの祭祀に参集するほ  
どに勝連グスクの勢力の大きさが窺われる(註6)。

しかし、そのように謡われる勝連グスクであつても、  
前述した1134は阿摩和利を通したてだ子讚美の  
オモロである。問題は、1134のてだ子は誰なの  
かである。それは第一尚氏の泰久なのかということ  
だが、そうではなく「おぎやか思い」(尚真王)で  
あると考えられる。同じ勝連間切のオモロは、その  
反復部で1149(平安座島のオモロか)「世のつほに  
おぎやか思いに みおやせ」(「世のつほに」〈不明。  
捧げ物の意か)を尚真王に奉れ)、1150(伊計島の  
オモロ)「島 かねて おぎやか思いに みおやせ」(集  
落をまとめて尚真王に奉れ)、1154(平安座島のオ  
モロ)「国手持ち おぎやか思いに みおやせ」(国  
手持ち(曲玉、あるいは数珠)を尚真王に奉れ)と  
謡っている。三首のオモロは平安座島、伊計島から  
「おぎやか思い」に「世のつほに」「国手持ち」等を  
奉ると謡っている。「阿摩和利」が生きた時代と尚  
真王が生きた時代はずれていても、第16-1134が  
謡うてだ子は尚真王と解釈される。すなわち、阿摩  
和利が謡われるオモロであつても、1134は尚真王

の時代のオモロである。これは尚真王統の時代認識  
として、勝連グスクの英雄が阿摩和利であると認識  
した上で、それを踏まえて阿摩和利を介した国王讚  
美を謡っている。阿摩和利は歴史化された人物にな  
っていると考えられる。

前述したように、『おもろさうし』は第1で尚真  
王による「八重山征伐」を謡っている。それには聞  
得大君による呪詛表現を含む激しい詞章が見られ  
る。また、第3にも聞得大君による尚寧王時代の惨  
禍、島津侵攻に抵抗するオモロが謡われている。そ  
のオモロには「八重山征伐」で謡っているような呪  
詛表現が島津の兵士に対して向けられており、琉球  
は島津に負けたことを謡っていない。「八重山征伐」  
の事績を高らかに謡うことと、呪詛表現を交えて島  
津侵攻に抵抗することを謡うことは、王権歌謡であ  
るオモロにとっては王国を維持する儀礼歌謡として  
は同じ意味を持つと理解される。神歌であるオモロ  
の表現は、リアリズムではない。阿摩和利と尚真王  
の生きた時代はずれていても、1134は尚真王讚美  
のウタとして第16に入っていると理解される。

第14-982で謡われる「謝名思ひ」を「浦添間切  
謝那村、奥間ノ大親ガ、一男子也」(『中山世鑑』巻  
2)を根拠に、伊波普猷以来、『おもろさうし 辞  
典・索引』『琉球文学大系 おもろさうし』を含め  
て諸注は察度王と解釈しているが、これが「謝名思  
ひ」を察度王と特定する根拠になるとは思えない。  
また、第15-1117「一字座のたち思いや 唐商い  
流行らちへ」と謡う「宇座のたち思い」を諸注は察  
度の弟「泰期」と解釈するが、これも不確かである。  
「たち思い」が泰期(たいき)ならオモロの表記は  
「たいき」、あるいは「たき」であり、キとチの書き  
分けがあるオモロでは「たちよもい」にはならな  
い。あるいは、第13-860に「永良部まごはつ」(後  
蘭孫八か)が謡われている。これも861等で謡われ  
る「永良部世の主」と同一の人物か不明であり、用  
例が少なく不詳である。さらに、尚真王の父とされ  
る「かねまる」(「かなまる」の用例はない)の用例  
は、第13-927、第14-1026、第21-1430(第11-  
618)、第15-1101にある。この内、尚円と解釈でき  
そうなオモロは、第14-1026「一聞糸金丸が 思  
ひ子の君の 遊べば 見欲しやしよわちへ 又鳴響  
む金丸が おなり神の 遊べば」(一名高い金丸の

愛しい子の君〈オトチトノモイカネか〉が神遊びを  
すると〈金丸は〉ご覧になりたくあって 又轟く  
金丸のオナリ神が神遊びをすると)がある。他の第  
13-927は屋嘉比杜(国頭間切屋嘉比村の御嶽)の  
神女、あるいはそのイベ名であり、第15-1101、  
第21-1430(第11-618)の「かねまる」は不詳  
である。第14-1026は尚円を謡っているとともに、  
「尚円尊君の御姫」(『女官御双紙』)である「思ひ子  
の君」(音智殿茂金)を謡っている。このオモロは、  
尚真王のヲナリ神を謡ったオモロでもある。結局は、  
1026は広く謡われている「おぎやか思い」のオモ  
ロの一首と捉えられる。つまりは、『おもろさうし』  
は基本的に「おぎやか思い」以前の時代の人物を直  
接的に謡ってはいない。あるいは謡っているとして  
も、第16-1134で見たように、『おもろさうし』が  
編纂された時代の歴史的人物(伝承的人物)を謡っ  
ており、それが尚真王統の王権を称えるオモロとし  
て謡われている。「『おもろさうし』に見る第一尚氏」  
を考える時に、これを前提とする必要がある。すな  
わち、第二尚氏時代の産物である『おもろさうし』  
が前代の王統をどのように謡っているか、あるいは  
謡わないのかということである。

以下では、第一尚氏が謡われていると思われる第  
19の佐敷間切関係オモロ、第一尚氏と関係のあっ  
た神女国笠(クンチャサ)を謡った第13のオモロ  
を取り上げて、第二尚氏の知念久高行幸の祭祀の中  
に位置付けられて謡われている第一尚氏関連のオモ  
ロを見ていく。そして、最後に『おもろさうし』「書  
きあらため」(1710年)の際に安仁屋本に入った「言  
葉聞書」に見る第一尚氏にかかわる伝承的記事を見  
ていく。

## II 第19「知念佐敷坡名城おもしろ御双紙」に見る 第一尚氏関連のオモロ

第一尚氏関連のオモロが謡われていると考えられ  
るのは、尚氏の居城とされる佐敷上グスクを謡う第  
19「知念佐敷坡名城おもしろ御双紙」の中の「佐敷」  
を謡ったオモロである。第19「知念佐敷坡名城お  
もしろ御双紙」は、いわゆる地方オモロに分類される  
巻である。地方オモロは、第2「中城越来のおもしろ」  
を始めとして、第15「浦添北谷読谷山おもしろ御双紙」  
から第21「久米の二間切おもしろ御双紙」までの間

切を単位にして編纂された八巻の「御双紙」をいう。  
第19は佐敷間切関係のオモロ(1281~1299)、知  
念間切関係のオモロ(1300~1317)、具志頭間切  
のオモロ(1318~1330)からなるが、第19は表題  
とオモロの排列が一致していなく、佐敷間切関係か  
ら始まる排列である。第19は例外で、他の地方オ  
モロは表題順の排列である。例えば、第2「中城越  
来のおもしろ」では前半が中城間切関連のオモロ、後  
半が越来間切関連のオモロの排列であり、第15「浦  
添北谷読谷山おもしろの御双紙」でも表題通りに、浦  
添、北谷、読谷間切関連のオモロが排列されている。  
第19のオモロの排列は、首里グスクから近い排列  
順になっていると推測される。すなわち、首里グス  
クから久高島を含む知念、玉城への国王行幸の順路  
に対応した排列であると考えられる。

これは、第22「公事(みおやだいら)おもしろ御  
双紙」の中の「知念久高行幸之御時おもしろ」(1529  
~1545)の詞書き(オモロが謡われる場が記され  
ている)を見ると分かる。その詞書きを抜き出すと  
以下である。

1529 首里御城御打立之御時/1530 与那原村稲  
福親雲上宿にて御規式の御時/1531 右同所御打  
立前に/1532 佐敷寄り上げ杜に/1533 斎場御  
嶽にて/1534 斎場御棧敷にて/1535 御船に被  
召候御時/1536 御船帆上ゲの御時/1537 久高  
海中(となか)にて/1538 久高外間御殿にて御  
規式の御時/1539 知念大川にて御規式の御時/  
1540 玉城藪薩の御威部の御前にて/1541 玉城  
天つづにて/1542~1544 暁のおもしろ/1545 御  
帰城の御時 附路次上下は知念佐敷おもしろ

「知念久高行幸之御時おもしろ」は、正確には「二  
月麦ノミシキヨマノ時」の知念久高行幸のオモロ  
と「四月稲ノミシキヨマノ時」の知念玉城行幸の場  
で謡われる詞書きが記されていると考えられる(註  
7)。1535~1538は前者の行幸の場面で謡われる  
詞書き、1539~1541は後者の行幸の場面で謡われ  
る詞書きであると推測され、さらに1545の詞書き  
が「御帰城の御時 附路次上下は知念佐敷おもしろ」  
とあるように、1529~1534、1542~1545は二つ  
の行幸で共通して謡われるオモロの詞書きであると

考えられる。「佐敷おもろ」は二つの行幸の道行きの中で謡われると考えられる。これを裏付けるのは、「佐敷おもろ」に続く「知念おもろ」は、「1300 知名／1301 久手堅／1302～1313 知念杜ぐすく（1309 知念杜）／1314 知念つめな／1315 大島押笠／1316・1317 久高あつめな」という排列である。「知念おもろ」は、佐敷間切に接する知名、久手堅から知念間切に属する久高島までを謡っているのである（註8）。

二つの行幸は、国王が聞得大君や司雲上按司（「三十三君」の一人で聞得大君に直接仕える側近の女官・神女）等を召し連れる。「知念久高行幸」についての記事は、久高地頭職にあった『恵姓家譜（六姓友良）』にも、以下のようにあり参考になる。

久高嶋江為<sub>二</sub>御祭礼<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub> 行幸<sub>一</sub>候時、御規式之事

一 二月御日撰次第、首里天かなし美御前御始、聞得大君、司雲上按司、あこむしられ御前、首里大あむしられ美御召付にて、未明二首里より御打立被<sub>レ</sub>遊、与那原二而朝御盆かなし御上り、旁御規式相済、被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>御打立<sub>一</sub>富祖寄（「崎」か）御棧敷江<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>御徘徊<sub>一</sub>、即刻、斎場之御嶽江御着座（以下、省略）

『恵姓家譜（六姓友良）』でも、聞得大君等を従えた国王が首里グスクを未明に出発し、与那原で朝食をとった後に与那原での儀式を済ませた後、富祖崎の棧敷に向けて出発して、そこを「御徘徊」した後、すぐに斎場嶽に着座すると記している。佐敷関係のおもろを考える時、『恵姓家譜（六姓友良）』に記される富祖崎での「御徘徊」という記事は注目される。充分には分からないが、富祖崎での「御徘徊」は佐敷間切の幾つかの祭場を巡拝することをいうか。そこに、第22-1532の詞書きで記される「佐敷寄り上げ杜」や以下の第19の佐敷関係おもろに謡われる「佐敷金杜」等が入っていると理解される。第19の佐敷間切関係おもろは、国王行幸の途次に位置する佐敷間切関連の巡拝の中で謡われていたと思われる。

### III 佐敷間切関係のおもろ（1281～1299）

佐敷間切関係のおもろ19首を具体的にみると以

下のようなものである。そのおもろの冒頭句を示す。

1281～1283 佐敷いぢへき按司／1284～1286 佐敷金杜／1287 佐敷／1288 佐敷金杜／1289～1290 佐敷苗代／1291 佐敷門口／1292 苗代の庭／1293～1294 与那嶺の大親・苗代の大親／1295 佐敷寄り上げの杜／1296 佐敷いぢゑき按司／1297 佐敷苗代／1298 佐敷／1299 佐敷いぢへき按司

佐敷関係おもろの冒頭句には、思紹や尚巴志などの具体的な名は出ない。これは前述した通り、おもろは普通名詞で国王や領主を謡うことがほとんどであり、具体的な王名や領主名を謡うことは少ない。その点で佐敷関係おもろも例外ではない。それを踏まえて佐敷関係おもろの冒頭句を見ると、佐敷上グスクを祭場として表現していると思われる佐敷金杜や佐敷寄り上げの杜（金杜とは別か、不明）や佐敷門口（佐敷上グスクの入り口）が謡われ、他に苗代の庭（「苗代ノ嶽」あるいは「苗代之殿」の「庭」）が謡われている。これも地方おもろの内容としては、特別ではないように見えるが、佐敷上グスクを示す「佐敷」の用例は二例しかなく、ほとんどが「佐敷金杜」という語で謡っている。これは注目してよい。それというのは、地方おもろが謡う地名の多くは、小規模のグスク（宇根グスク等）やグスクの特徴的な形状（土ぐすく・石ぐすく・杜ぐすく・たうぐすく等）を謡う場合は別として、それぞれの間切の大型グスクを「～ぐすく」というかたちではなく、例えば第2では「中ぐすく」「あだにや」「ごゑく」、第15では「うらおそい」「きたたん」「よんたむぎ」、第16では「かつれん」「ぐしかわ」、第17では「みやきせん」「なご」等というように謡っている。例外は首里グスクで、首里グスクは「しより／ぐすく」の対句で謡われる。地方おもろのこれらの用例が、「～ぐすく」というかたちではないために『おもろさうし 辞典・索引』等ではこれを行政名（間切名）や村落名と誤解している。しかし、地方おもろの地名の多くはグスク名と理解した方がよい。地方おもろが謡う地名の多くは、その間切の大型グスクを謡い、グスク内にある御嶽や庭（みや）を祭場とする祭祀やその祭場を管轄する神女、城主（按司）讚美、

またグスクそのものの讚美を謡っている場合が多い。すなわち、それは間切の祭祀を謡うことを基本にしていると考えられる。それは、後に編纂された『琉球国由来記』（1713年）の第12巻以下の「各処祭祀」の記載にも反映されていて、各間切の筆頭に記載される御嶽・殿等は、間切の大型グスク城内にある拝所であることが多いのである（註9）。

そのような地方オモロにあって、佐敷上グスクを「佐敷」と謡うオモロは1287と1298を例外として、他は「佐敷金杜」と謡っていることは注目される。「佐敷」と謡う二例のうちの1287は、「一佐敷からもたい子 来ちゑ やちよ 白雪は おぎやか思いに みおやせ」（一佐敷グスクからもたい子が来て やちよ〈囃し〉 白雪〈米の美称語か〉を尚真王に奉れ）、1298は「一佐敷から 御捧げや 上て」と謡うオモロである。この二首は同様の内容のオモロで、「白雪」「御捧げ」を佐敷グスクから尚真王に献上することを謡っていると理解される。一方、「佐敷金杜」を謡うオモロは、例えば1285「一佐敷金杜に 綾手 打ちちへ なよれば 精の君と 君と」（一佐敷金杜に美しい舞いの手を打って踊ると 精の君と君とが〈踊る〉）、1286「一佐敷金杜に 精の君は 手擦て 大君しよ 知ろわめ」（一佐敷金杜に精の君を拝んで 聞得大君こそはそれをお知りになるのだ）と謡う。「佐敷金杜」は祭場なのである。

佐敷関係オモロの際立つ特徴は、佐敷上グスクの神女（ノロ）が登場しないことである。例えば、「中城おもろ」では中城グスクを管轄する神女、「よきやのろ」が第2-51・55・56に謡われる。加えて、地方オモロではほとんど謡われることがない国王のヲナリ神である君々、精の君と（おそらく）聞得大君を1285・1286は謡っている。この理由は佐敷関係オモロが国王の行幸に扈從した君君を謡っているからであると推定される。前述した『琉球国由来記』や『恵姓家譜（六姓友良）』のような近世期の資料には、「精の君」が行幸に同行する記事は見られないが、かつては「精の君」の同行があって「佐敷金杜」で祭祀を執り行っていたことが想像される。いずれにしても、佐敷関係オモロには佐敷上グスクを謡う「佐敷」の用例が少なく、佐敷上グスクを祭場として謡う「佐敷金杜」の用例が圧倒的で、その内容は土地の神女（ノロ）の登場がなく、君君が登場

する祭祀が謡われていることが特徴である。

もうひとつの佐敷関係オモロの特徴は、佐敷いぢへき按司、与那嶺の大親・苗代の大親という男性的人物が多く謡われる点である。特に、佐敷いぢへき按司は、合わせて5首謡われている。「いぢへき」は「言葉聞書」に、「すぐり」「勝也」「器量勝たると云なり」とある語である。苗代の大親には「言葉聞書」に「此人佐敷小按司の御父なり」と注が付く。佐敷いぢへき按司や与那嶺の大親・苗代の大親が謡われる背景には、尚思紹・巴志親子の存在が感じられる。佐敷関係オモロの冒頭歌である1281は「一佐敷いぢへき按司に 似ら人は 肝倦みてだ」（一佐敷の勝れた按司に似た人は待ち焦がれたテダだ）と謡われ、1295は「佐敷の寄り上の杜に 島寄せる鼓の有る按司」（一佐敷の寄り上杜に集落を寄せる鼓を持つ按司がいる）と謡っている。佐敷いぢへき按司が称えられ、これが国王等の行幸の中で謡われるのは、当時の王統が前代の王統に対する敬意を示していると考えてよいのではないか。ここに王権の祭祀の連続性を見ることができる。

実は、佐敷関係オモロは第14「色々のゑさおもしろ御双紙」にも連続して8首のオモロが1012～1019に謡われている（註10）。その中の1013には佐敷いぢへき按司が謡われていて、「一佐敷いぢゑき按司の あはれ真男 百島 討ちちへ 掛けて 相応よわれ」（一佐敷いぢゑき按司のあっぱれな真男 多くの集落を討って支配して調和なされ）と謡う。このオモロは三山を統一した思紹・尚巴志親子の姿が髣髴される。次の1014は「一佐敷金杜や 按司の躰で親国」（一佐敷金杜は、按司の誕生する親国）と謡う。「按司の躰で親国」という表現は、それ程特殊なものではなさそうだが、第15-1071「一聞ゑ浦添や 按司の躰で親国」にしか用例がなく、佐敷上グスクと浦添グスクが同じ表現で謡われている。ここからは推測を重ねることになるが、佐敷間切関係のオモロ19首の内、17首が「うらおそいのおやのろがふし」という「ふし名」で謡われている問題がある。これもなにか関連があるのか。「ふし名」は分からないことが多く、『おもろさうし』研究の最大の課題であるが、「うらおそいのおやのろがふし」の「ふし名」グループが「あおりやへふし」の「ふし名」グループに次いで多い「ふし名」

としても、佐敷間切関係のオモロのほとんどが「うらおそいのおやのろがふし」で謡われる点は、他に例がなく注目される。さらにもうひとつ、『琉球国由来記』巻13「佐敷間切」に以下に記す不思議な記事がある。

#### 279 殿（城御嶽内二有） 佐敷村

麦穂祭之時、苗代之殿同前也。稲二祭之時、五水四合宛（百姓）供之。佐敷巫祭祀也。同時、タモトへ坐シケレバ、浦添地人、刀一腰（昔ヨリ相伝也）、明松一束（長一尺五寸・廻一尺）七所結、又藁火繩七所結、打マツニテツケ、盆二居、根人持参ニテ、トボシニ火付、御嶽ノ門ニ灯シ、五水四合供之。地人拝仕也

『琉球国由来記』が記す「各処祭祀」（巻12以下）の記事において、隣接の間切の人々がかかわるような記事はなく、まして佐敷間切から遠く離れた「浦添地人」が参加するというこの記事は特異である。前述した1014と1071の事例と合わせると、前々代の王統と前代の王統があった土地のなんらかの祭祀上の交流があったことが想像される。特に、「浦添地人」が「刀一腰（昔ヨリ相伝也）」を「持参」して、佐敷上グスク城内の「殿」の「稲二祭」（稲穂祭と稲の大祭）に参加するという点は注目される。「刀」は武力の象徴で、宮古島の仲宗根豊見親が尚真王に献上した「冶金丸」の記事（『中山世鑑』）や尚巴志が北山王を討つ時、北山王が自害する太刀で「城守護ノイベ」を切り破りそれを重間河（しけまがわ）に投げ入れたのを後に伊平屋の人が発見して中山王に献上した「千代金丸」の記事（蔡温本『中山世譜』）がある。これらの記事は、琉球の南北の軍事力が中山王に集められる叙述と解釈される。なお、記事にある後に伊平屋の人が発見して中山王に献上したという叙述は興味深く、この中山王は尚巴志ではなく第二尚氏王統の王であろう。これは、前述した第16-1134で述べたことと同じ問題がある（註11）。

佐敷間切関係には、1287と1289に「おぎやか思いに みおやせ」と謡う詞章がある。佐敷間切関係オモロに尚巴志王統の姿が見え隠れしながらも、あくまでもそれは尚真王統の産物であり尚真王統の歴史認識があらわれたものと理解される。それにかか

わる重大な問題は、大里間切関係オモロと玉城間切関係オモロが入る第18「島中おもしろ御双紙」（1249～1280）に、『中山世譜』『球陽』で佐敷上グスクの後の第一尚氏の拠点となったとされる島添大里グスクを謡うオモロが一首も謡われていないことである。「島中おもしろ御双紙」前半部の大里間切を謡う1249～1255に、大城（大城グスク）が3首（1253～1255）謡われていても、大里間切最大の大型グスクである島添大里グスクは謡われていない。これは地方オモロにあっては異例である。ちなみに、玉城間切を謡う1256～1280には、玉城グスクが5首（1262～1265、1273）、糸数グスク3首（1275～1278）が謡われている。『おもしろさうし』が、島添大里グスクを謡わないことは謎である。

第14-1013・1014で尚巴志王統の姿が見え隠れするオモロがあると思われ、第19の佐敷間切関係オモロは国王の知念久高行幸、知念玉城行幸の途次に位置する佐敷巡拝（「徘徊」）の中で謡われることが基本である。次にこの問題を第13「船舩とのおもしろ御さうし」に謡われる神女、国笠（クニチャサ）を謡うオモロで考えてみる。

#### IV 第13「船舩とのおもしろ御さうし」に謡われる神女国笠（クニチャサ）

国笠は尚徳王の寵愛を受けた神女と伝わる（伊波普猷『南島方言史攷』1934年、新垣孫一『琉球発祥史』1955年）。『久高島方言基礎語彙辞典』に「（国笠は）久高島のウヅフラトゥヌル（大里ノロ）のこと。五穀の壺を埋めたハタスを管理している大里家のノロ。尚徳王が喜界島を征討して戦勝報告に久高島へ渡海された際に寵愛を受けたノロである」と記している。尚巴志王統期に国王の久高行幸があったことが窺える記事は『中山世鑑』巻4の尚円の記事に、「先王ノ制ニ、知念・久高へ行幸ノ時ハ、都鄙遼遠ノ道ナレバ、供奉ノ人々ノ、飢ヲ安メン為ニ、与那原ニ於テ、酒食ヲ賜リケル、其例アリ」がある。

第13は『おもしろさうし』最大の巻で、236首ものオモロが入る。その第13（746～981）は、大きく（1）首里グスクで行われた航海儀礼歌群（746～763）、（2）中国から琉球に向かう船（主に琉球船か）を謡う航海儀礼歌群（764～810）、（3）久高行幸関係航海儀礼歌群（819～854、972～981）、（4）

沖縄から奄美・薩摩へ向かう航海儀礼歌群（902～949）の4グループのオモロ歌群がそれぞれ連続して排列されている（2と4はいずれも南風の中の航海である）。国笠を謡うオモロは、(3)の中で謡われている。国笠も国王の知念久高行幸にかかわって謡われるオモロである。国笠を謡うオモロは837で、次の神女「あけしの」を謡う838と連続して謡われる。

- 837 一国笠の親のろは 船頭 し遣り  
もぢろ弥帆 うら巻きちへ 走りやしよわ  
又国笠の若のろは（以下省略）
- 838 一あけしのゝ神にしや やれかゑ  
やゝの弥帆 煽らちへ  
又なよ笠ののろにしや  
（途中省略）  
又あけしのわ 船頭 し 上手  
又なよ笠わ 手取り 上手（以下省略）

「あけしのゝ神にしや／なよ笠ののろにしや」という対語は、次の839にも出る。対語の「なよ笠」は三平等之大阿武志良礼（みひらのおおあむしられ）の一人の首里大阿武志良礼の「神名」で、首里大阿武志良礼は久高島に出自があるとされる神女である（『女官御双紙』）。他の二人の大阿武志良礼（真壁大阿武志良礼・儀保大阿武志良礼）よりも優位にあり、三平等之大阿武志良礼の中で唯一、国王の久高行幸に聞得大君等とともに同伴する神女である。久高島行幸関係航海儀礼歌群（819～854）の冒頭句は以下である。

- 819～836 一東方の大主／又てだが穴の大主  
（830「東方のあけもどろ／てだが穴のあけもどろ」、  
834「地天鳴響む大主／天地鳴響む大主」を含む）
- 837 一国笠の親のろは／又国笠の若のろは
- 838・839 一あけしのゝ神にしや／又なよ笠ののろにしや
- 840～848 一聞ゑあけしの／又鳴響むあけしの
- 849 一煽りこしりやへ／又君のこしりやへ
- 850 一月しろの大主
- 851 一天に鳴響む大主／又地天鳴響む大主

837の「国笠」も、838～848の「あけしの」も

久高島に所縁のある神女である。その837・838は共通して「せと」（船頭）をすると謡っている。しかも、838は「あけしの」を謡う歌群の冒頭のオモロである。「せと」（船頭）をすることは、ここでは国王等の一行を先導をする役割を示した表現と理解される。聞得大君の就任儀礼とされる「御新下り日記」（『神道大系 沖縄』）には、首里大阿武志良礼が、聞得大君一行の先頭に立って与那原の祭場に赴く図がある（他の二人の大阿武志良礼は首里グスク赤田御門で見送り、出迎える）。「船頭 し 上手」（船頭し上手）は、久高島行幸の国王等を先頭する首里大阿武志良礼を称えた表現と理解される。837も同様、国笠が国王等を先頭する姿を謡ったオモロと理解してよいのではないかと（註12）。すなわち、久高島行幸関係航海儀礼歌群は、二人の久高島に所縁がある神女が先導するかたちで国王等の行幸が謡われている。そのひとりが第一尚氏にかかわりがある国笠ということになる。これらに続いて、さらに次の三首が続く（852・853は冒頭句）。

- 852 一聞得大君が 精遣りとみ 召しよわちへ／又  
鳴響む精高子が てよりとみ 召しよわちへ
- 853 一せぢ新神泊／又雲子寄せ泊
- 854 一首里ちよわる 聞ゑ按司襲い 精遣りとみ  
押し浮けて 蒲葵杜 ちよわちへ 百歳せぢ 按司  
に みおやせ 又真玉杜ちよわる 英祖にや真末按  
司襲い ておりとみ 押し浮けて 又聞得大君と  
蒲葵杜司と 御言 合わしよわちへ 照るかはに知  
らせて 又鳴響む精高子が 蒲葵杜司と 御言 合  
わしよわちへ（照るかはに知らせて）又国笠の親  
のろ かに 撥ねて おぎやか思いに 知られゝ  
又奇せ清らの大のろ かに 撥ねて おぎやか思い  
に 知られゝ 又首里杜ちよわる おぎやか思い按  
司襲い 今からと 末 勝て ちよわる

852・853・854の連続する三首は、前段（819～854）の久高行幸関係航海儀礼歌群の最後に位置するオモロである。特に、この三首はウタの内容の関連性が強い。852は斎場嶽から久高島へ向かうオモロ、853は久高島から首里グスクに帰還するオモロ、854は久高島のクボ一嶽での国王・聞得大君、久高島の神女等の儀礼を謡ったオモロと理解される。

854で謡われる国笠は、国王等が行幸して行われるクボ一御嶽の儀礼において、聞得大君がクボ一杜司と言葉を合わせてテルカワに願い知らせて（その内容は、反復部の長寿の靈威を按司（国王）に奉れというもの）、それを受けて国笠がこれに感応して（註13）、おぎやか思いにそのことを知らせよと謡っている。国笠に焦点をあてて捉えると、国笠は聞得大君とクボ一杜司が国王の長寿をテルカワに祈ったことを国王に伝える役割を担っていたか。いずれにしても、第一尚氏と所縁のあった国笠もおぎやか思いの長寿を願う祭祀にあけしのとともに参加し、その祭祀を支えていることが分かる。

854が謡われる場面に相当する『恵姓家譜（六姓友良）』の記事は、「一 こはう御嶽ニ御参詣御祭礼被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>遊<sub>ニ</sub>〔 〕（五字程欠）子盆ニ御手目（注。御天目茶碗のこと）、御壺ハ白砂糖御だご、御壺ハ□□□御米おかけ（注。「おかけ」はよそう意か）、且又御穂七穂白紙にて包（注。「御穂」は麦の穂か）、御茶□居上候得者、御載御上り被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>召候。右御祭礼旁相濟候得者、所之のろ、おきて、作事あむ相合、こわいにやからめき申候事」である。国王は天目茶碗によそわれた白糖の団子と「御米」、麦穂と思われる「御穂七穂」を戴きそれが終わると久高島のノロ達が「こわいにや」（クエーナ）を謡うとある。「こわいにや」は国王の長寿を願い称えたウタなのか。

先に見た尚巴志王統にかかわる第19の佐敷関係オモロは、佐敷金杜、佐敷寄り上杜等が国王等の知念久高行幸、知念玉城行幸の道行の途次に巡拝される祭場であると理解されることを述べたが、第13の国笠を謡うオモロも久高島行幸関係の航海儀礼歌群のオモロである。そのオモロはいずれも、尚真王統の祭祀を支える祭祀歌としてであると理解される。『琉球国由来記』巻13の「60 友盛ノ嶽御イベ 与那原村」と「298 パテン巫火神 新里村」に記される記事も、尚真王統の祭祀を支える馬天ノロの姿が窺える。馬天ノロは佐銘川大主の「一女」とされ、いうまでもなく「一男」は思紹である（『中山世譜』）。298は、聞得大君が久高島への祭礼の際に遭難し、琉球が七ヶ月に及ぶ早魃になってしまう。それを馬天ノロが船頭となり大城ノロが船筑になって、大和に漂着していた聞得大君を救助して無事に帰還するという記事である（『佐銘川大ぬし由来記』は馬天

ノロがさらに活躍する叙述になっている）。60は、聞得大君が御新下りの時、与那原で馬天ノロの神名「テダ白」が聞得大君の神名と同じであることを畏れ多いとして「改名」し「ヨナワシ大神」にしたという記事である。これらも尚巴志統の神女、馬天ノロが、尚真王統の最高神女、聞得大君を支える記事として理解できる。

最後に、佐敷間切関係オモロに入る「言葉聞書」を見ていく。それには、第一尚氏にかかわる伝承が記されている。これを『佐銘川大ぬし由来記』の記事と合わせて見ていく。

## V 佐敷間切関係オモロに入る「言葉聞書」

第19の佐敷間切関係オモロに入る第一尚氏にかかわる「言葉聞書」は、以下のオモロに入る（『混効験集』に入る注には○印を付けて記す。また、『佐銘川大ぬし由来記』が引くオモロは通し番号を□で括って示す）。

1289 一佐敷、苗代に、あまみやから、孵で水、

\*○あまみやから むかしの事なり／  
すでみづ 佐敷小按司おほ御水の事也

1290 一佐敷、苗代なわしるに、

孵で物真物真玉の  
とりやかる、みしやこ

又もたい苗代に

\*すで物 誕生之事／○ま物 男子之事／  
○みしやこ 能か事と云事也／  
もたい 栄へる事なり

\*『佐銘川大ぬし由来記』に生まれた巴志を翁が苗代大やに引き渡す時の「神歌」

1291 一佐敷、門口に、

鬼鷲の、羽打ち、する、見物

\*おにわし 誕生之子がなく事  
鬼々わしへ とする事／

はねうち、する 子か手足差上勤

はたらく事をいふなり

1292 一苗代の、庭に、月しろは、手擦て

月しろす、なさい子思い、守りよわめ

\*月しろ 苗代の大や庭ニ御座有靈石  
之事なり／

なさいきよもい 父親之事也

- \*『佐銘川大ぬし由来記』に月しろが「御子」(巴志)の行く末を守る神であることを謡う「神歌」

[1294] 一与那嶺大親、綾、鶯ひよとり、  
遊ばちゑ、今からど、いみきや、勝る  
又苗代の大親、綾

- \*よなみねの大や 苗代大や事なり  
(1293にも同じ「言葉聞書」が入る)/  
なわしろの大や 此人佐敷小按司の  
御父なり

- \*『佐銘川大ぬし由来記』に翁が巴志を  
苗代大やに引き渡す時の「御宣託」

「言葉聞書」は、安仁屋本に入る注である。『おもろさうし』の第19(50首)には、60もの「言葉聞書」が付く。「言葉聞書」が付く割合は『おもろさうし』全22巻の中で突出している(2位は第21、114首に91付く)。さらにその中でも、佐敷間切関係オモロ19首には39の「言葉聞書」があり、知念間切関係オモロ18首に12、具志頭関係オモロ(「坂名城おもろ」)13首に9付くのと比べると、佐敷間切関係オモロ19首に付く「言葉聞書」の数は飛び抜けて多い。先に示したのは、その一部の第一尚氏にかかわる「言葉聞書」である。「言葉聞書」はほとんどはオモロの語注を内容としており、多くが「言葉聞書」に先行して編纂作業が進められていた『混効験集』(特に坤巻)の注と重複する。しかし、注目されることは、第一尚氏にかかわる「言葉聞書」は『混効験集』の注にはなく、「書きあらため」の時に新たに入った注と考えられる。それはどうして起こったのか。

それは、「書きあらため」の「筆者」のひとりに第一尚氏を始祖とする孫姓「並里筑登之親雲上嗣喜」が加わっていることによると推測される。『混効験集』の「筆者」はひとりであるが、「書きあらため」の「筆者」は、「伊良部築登之親雲上重休／並里筑登之親雲上嗣喜／瑞慶田築登之親雲上正方／小渡筑登之元敷／嘉数子宗宣」の五人である。そのひとりに嗣喜がいる。特に1289～1294は、孫姓の間では巴志誕生にかかわるオモロとして伝えられていた伝承を嗣喜が記したと考えられる。その中にあって、『佐銘川大ぬし由来記』では1294を「御宣託」

としており、これが重要なオモロと考えていたと見られる。『佐銘川大ぬし由来記』は康熙60年(1721)の「与那嶺」の記事で終わる。その「与那嶺」は康熙21年(1682)生まれ。嗣喜は康熙4年(1665)生まれで、乾隆4年(1739)に亡くなっている(『孫姓家譜(平田家)』)。「与那嶺」と嗣喜はほぼ同時代の人で、『佐銘川大ぬし由来記』の成立にも嗣喜がかかわっていた可能性が高い。『佐銘川大ぬし由来記』の叙述にオモロを利用できたのも、嗣喜が「書きあらため」の時の「筆者」であったからであると考えられる。

第一尚氏にかかわる「言葉聞書」は、第14の佐敷関係オモロ(1018)にも見られる。

[1018] 一手登根の大屋子 唐の道 開けわちへ  
手登根す 日本内に 鳴響め  
\*てとこんの大やこ 昔大唐へ初而参たる  
人のよしなり

オモロの内容は、「唐の道」(中国との朝貢、外交、交易等)を開いたことが「日本内」に轟いたと謡われて興味深い。『佐銘川大ぬし由来記』では、「平田の大比屋男子手登根大比屋、唐江御使し、渡唐にて、御官位勅使、御当国江渡らせ給ふ。奉号尚巴志王君と、千慶万悦の御ことぶき限なし」と記される後に、1018に相当するウタが「唐の道明る神歌」として引かれる。『佐銘川大ぬし由来記』の記事は、中国の皇帝に対して「尚巴志王」と名乗ったと記した記事である。『球陽』「尚巴志王」「85 九年(1430)、内官柴山・阮某、国に至り、王に尚姓を賜う」等が対応する記事になる。この「言葉聞書」も『混効験集』には見られなく、嗣喜がかかわっている可能性が考えられる。

第14にある一連の佐敷関連オモロには、第19の佐敷間切関連オモロとほぼ同じ内容のオモロ(佐敷金杜や佐敷いちゑき按司等)が謡われるが、1018に手登根の大屋子や1019に平田みぢゑりきよ(神女)が謡われている。第19の佐敷間切関連オモロの基本が、国王の知念久高島行幸の道行きの途次にある国王が参拝する祭場を謡っている性格が強いのに対して、第14の佐敷関連オモロはそれだけではないオモロがあることは注目される。これは、地方オモ

口と第14「ゑさおもろ」との違いを考える材料になるか。また、第13-862には馬天のろが謡われているが、これが第19や第14の佐敷間切関連オモロに謡われていない理由は不明である。

なお、王府が編纂した『琉球国由来記』にも、佐敷間切を記した記事（巻13「各処祭祀」）に第一尚氏関連の記事が割注で入っている。

260上城ノ嶽 弐御前（素是佐敷小按司御在所タル由也） 佐敷村

270上バテンノ嶽 神名 サメガア大ヌシタケツカサノ御イベ（昔佐敷按司御屋敷タル由也）与那嶺村

277苗代之殿（此殿ノ庭二月白ト云イベアリ。祭之時ニ尊ニ敬之也） 佐敷村

278美里之殿（与那嶺大屋子根所也） 佐敷村

280殿（有ニ城内ニ。往昔佐敷按司蔵敷也） 佐敷村

『琉球国由来記』に入るこれらの第一尚氏にかかわる割注も、広くは「言葉聞書」と同時代的な伝承を記した割注である。このことは佐敷間切関連オモロに入った第一尚氏にかかわる「言葉聞書」の内容は、孫姓を越えて広がっていた伝承であることを想像させる。

## VI まとめ

『おもろさうし』に謡われる第一尚氏関連のオモロは、第19の佐敷間切関係オモロに謡われていて、それは知念久高、知念玉城行幸の道行の途次にある国王等が巡拝する祭場（佐敷金杜、佐敷寄り上げ杜等）で謡うオモロとしてあると考えられる。また、第13にも第一尚氏関連のオモロは、久高行幸のオモロの中にある国笠を謡うウタにあると理解される。それらは、いずれも第二尚氏の祭祀を支えるオモロであると見られる。ただし、第19の佐敷間切関係オモロや第14に並ぶ佐敷間切関係オモロの一部に、尚巴志親子の存在が背景にあると見られるオモロがある。その一方で、第18には新たな尚巴志王統の拠点になったと伝えられる島添大里グスクを謡ったオモロが一首も謡われていないという問題がある。これは、尚真王統の祭祀（行幸）に位置付けられない尚巴志王統関連のオモロは除かれた可能性がある。阿摩和利を歴史化した人物として謡っても、尚



写真1 島添大里グスク基壇遺構



写真2 現地に残る島添大里グスク建物跡の礎石

巴志王統の新たな拠点である島添大里グスクを謡わない。この「沈黙」は、島添大里グスクが尚真王統にとってはいまだ歴史化できない生々しい場所であったからか。それを少し紐解くことができる興味深い島添大里グスクの発掘調査事例をここで上げておきたい。

南城市教育委員会による島添大里グスクの主郭において発掘調査が過去、実施された際に礎石建物跡と基壇建物跡が検出され、その消長が明らかとなっている（写真1,2）。それは14世紀後半において基壇建物が建てられ、15世紀前半に東西24m×南北14mの礎石建物に改築され、15世紀中ごろから16世紀前半頃まで機能したとして報告されている（池田2011）。この調査成果から島添大里グスクでは山南王の時期に基壇建物とその周辺が整備され、そして1406年の思紹と尚巴志によって本拠地として以

降に大きく礎石・基壇建物が改築されたことを読み取ることができる。すなわち、山南王統治時の仕様から第一尚氏統治の仕様へと大きく改変したことが窺える。

先述したように沖縄本島南部でも面積約3万㎡を有する大規模なグスクであることから、第一尚氏治世下においては重要なグスクとして位置付けられていたことは容易に想像される。それは「琉球国王大世主庚寅慶生□□」「大里城」「天順二年八月八日」の銘を入れた雲板を尚泰久王が製作していること（山里1963）、更に『朝鮮王朝実録』にて尚徳王が「旧宮」、すなわち島添大里グスクへ行幸していることから1450年代から1460年代においてもその位置付けは大きく変化していないことが窺われる。

加えて発掘調査の成果から16世紀前半頃まで機能していたとしていることから、おそらく尚真王代まではグスクとして使用されていた可能性も指摘できる。何らかの理由により尚真王代あたりでその機能を停止したことを考えると『おもろさうし』の中で大規模なグスクであるにもかかわらず謡われていない、第一尚氏仕様の島添大里グスクに見る生々しい場所の意味を想起させられるように思われる。

『おもろさうし』から見える第一尚氏にかかわるオモロは、前代から継続した知念久高行幸、知念玉城行幸の巡拝の中で佐敷上グスクの祭場、佐敷金杜等で前代の王統を敬仰するオモロを謡い、並行して尚真王統のヲナリ神による祭祀を執り行うことを謡うオモロであったと理解される。第19の佐敷間切関係オモロはそのようなものと理解される。

ただ、オモロの本文とは別に、「書きあらため」の時に安仁屋本に入った「言葉聞書」には、第19の佐敷間切関係オモロに第一尚氏にかかわる伝承が記されている。これは「書きあらため」の「筆者」に孫姓並里筑登之親雲上嗣喜が加わっているからであると見てよい。それらの伝承は、同時代の編纂書である『琉球国由来記』にも見られる。これらの第一尚氏にかかわる伝承は、孫姓を越えた広がりがある伝承であったことを物語る。『佐銘川大ぬし由来記』の編纂には、嗣喜がかかわった可能性が高い。『おもろさうし』に見られる尚巴志王統の姿を探る解釈は、『おもろさうし』を歴史叙述の書と

して読む切り口を私達に与えてくれる。

## 【註釈】

(註1) 「第一尚氏」という語の初出は、柳田国男「南島研究の現状」（啓明会琉球講演会講演、1925年の「王国成立以前」）であると見られる。その一年後、伊波普猷は『孤島苦の琉球史』（春陽堂、1926年の「四 三山統一と海外貿易」）、同『琉球古今記』（刀江書院、1926年の「琉球史上に於ける武力と魔術との考察」）でこの語を早速取り入れている。ただ、島倉龍治・真境名安興『沖縄一千年史』（小沢書店、1923年初版）は「尚思紹王統」、東恩納寛惇『琉球の歴史』（至文堂、1957年初版）は「尚巴志王統」と記し、「第一尚氏」という語は使っていない。本論では、適宜「第一尚氏」「第二尚氏」、あるいは「尚巴志王統」、「尚真王統」の語を使う。なお、「孤島苦」という語についても、琉球研究で使われた語としては、柳田「島々の話 その四」（『太陽』第30巻10号、1924年）が初出であると見られる。これを伊波が翌々年に刊行した著書『孤島苦の琉球史』の書名に取り入れている。柳田の斡旋によって刊行された『校訂 おもろさうし』（南島談話会）は、1925年の出版である。伊波の上京も1925年である。この頃の伊波は柳田の影響が強く窺われる。

(註2) 拙論「[03]〈沖膾 しめて／辺膾 しめて〉—島津の琉球侵攻を呪詛する—」（『日本歌人選056 おもろさうし』笠間書院、2012年所収）、「[25]「嶺間くびり 七十 倒ちへ／儀保くびり 百十 倒ちへ」—琉球侵攻、首里の戦い—」、「[44]「雨くれ 降ろちへ 鎧 濡らちへ」—薩摩の軍船を迷わす—」（『おもろさうし選詳解』文学通信、2023年所収）。

(註3) 沖縄県教育庁文化課『金石文』沖縄県教育委員会、1985年。

(註4) 沖縄県教育庁文化課『辞令書等古文書調査報告書』沖縄県教育委員会、1978年。

(註5) 拙論「琉球の「歴史」叙述—夏氏（内嶺家）・毛氏（豊見城家）の家譜記事と正史叙述を中心に—」（『琉球文学の歴史叙述』勉誠出版、

2015年所収)。

- (註6) 拙論「〔18〕勝連の阿摩和利／肝高の阿摩和利」注2の『日本歌人選056 おもろさうし』所収、「〔49〕勝連す 国手持ちぐすく一勝連グスクのカー」注2の『おもろさうし選詳解』所収。
- (註7) 知念久高行幸は「二月麦ノミシキヨマノ時、隔年一次、行<sub>二</sub>幸于久高島<sub>一</sub>（聞得大君・司雲上按司、御召列也）、有<sub>二</sub>御祭礼<sub>一</sub>也」とする公事、知念玉城行幸は「四月稻ノミシキヨマノ時、隔年一次、行<sub>二</sub>幸于知念及玉城<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>御祭礼<sub>一</sub>也（聞得大君・司雲上按司、御召列也）」とする公事である（『琉球国由来記』巻一「王城公事」）。二つの行幸は、『羽地仕置』によって「康熙十二年（1673）停止される。
- (註8) なお、知念間切関係オモロの後には、具志頭間切関連オモロ（「坂名城おもろ」）が続くが、知念間切と具志頭間切は地続きになっていないという問題がある。具志頭間切関連のオモロが全て「坂名城おもろ」であることも謎であるが、具志頭間切と知念間切の間には玉城間切があり、玉城間切関連のオモロは大里間切関連のオモロとともに第18「島中おもろ御双紙」に入っている。第19には、そのような謎がある。第19の「坂名城おもろ」だけが、沖縄本島南部の西側地域を謡う第20「米須おもろの御双紙」と重複するオモロがあり、これと合わせて理解すれば具志頭間切関連オモロ（「坂名城おもろ」）は第20に位置したオモロであった可能性がある。
- (註9) 拙論「「地方オモロ」論一 排列と『琉球国由来記』「各処祭祀」の記載から一」（『立正大学大学院文学研究科紀要』第36号、2020年）。
- (註10) 拙論「「色々のおもろ御双紙」第九・第十二・第十四の排列」（『琉球文学の展望』文学通信、2024年所収）。
- (註11) 拙論「〔43〕「按司の躰で親国」一 佐敷と浦添と一」、注2の『おもろさうし選評釈』所収。
- (註12) 拙論「排列からオモロを読む一久高島行幸歌、「あけしの」を謡うオモロを中心に一」（『沖縄文化研究』第53号、2026年掲載予定）。849も同様に「一煽りこしりやへ／又君のこしりやへ」が「船頭 し遣り」と謡うオモロである。「煽りこしりやへ」は聞得大君に扈従する司雲上を

さしているのか。

- (註13) 「かに はねて」の「はねて」を感応してとするのは『沖縄古語大辞典』角川書店による。それには「①撥ねる②感応する〔あかぐちやがよいつき せいくさてゝ はねて〕」とある。

#### 【主要参考文献・引用文献】

- 山里永吉1963「大里城の雲板」『壺中天地』光有社
- 横山重編纂1972「中山世鑑」『琉球資料叢書』東京美術
- 横山重編纂1972「中山世譜」『琉球資料叢書』東京美術
- 球陽研究会1974『球陽』角川書店
- 沖縄県教育庁文化課1985『金石文』沖縄県教育委員会
- 沖縄古語大辞典編集委員会1995『沖縄古語辞典』角川書店
- 外間守善・波照間永吉1997『定本 琉球国由来記』角川書店
- 外間守善・波照間永吉2002『定本 おもろさうし』角川書店
- 池田榮史2011「第5章 島添大里グスク正殿部分の変遷について」『島添大里グスク一都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書一（5）』
- 福治友邦・加治工真市2012『久高島方言基礎語彙辞典』法政大学沖縄文化研究所
- 琉球文学大系編集刊行委員会2022『おもろさうし』上 ゆまに書房
- 琉球文学大系編集刊行委員会2023『おもろさうし』下 ゆまに書房

**補注** 本論の島村執筆部分は、2025年12月14日に沖縄県立博物館・美術館で行われた「『おもろさうし』に見る第一尚家」と題する講演（沖縄県立博物館友の会主催）のレジメを元に行っている。質疑の中で、佐敷寄り上杜が佐敷小学校の裏手の杜であることを教えられた。感謝申し上げます。